

第7回INASサッカー世界選手権 2018

日本代表 報告書 (ver 01)



写真：JFFID/Koichi Saito

1. ご挨拶と選手派遣ご支援の御礼
2. 大会概要
3. 大会結果
4. 日本代表スケジュール
5. 大会・代表総括
6. 出場選手、スタッフのご紹介



1. ご挨拶と選手派遣ご支援の御礼

2018年8月、特定非営利活動法人日本知的障がい者サッカー連盟は、スウェーデンで開催されました第7回 I N A S サッカー世界選手権2018に日本選手団を派遣いたしました。

この度の選手派遣におきまして、日本全国からTシャツの購入やご寄付などを通して多大なご支援をいただきました。また、大会期間中も、試合時間が深夜帯にもかかわらず大会Live中継や、当連盟ホームページ、Facebookをご覧いただき、たくさんの激励や応援のメッセージいただきました。

渡航費用が厳しい中、皆様の資金面でのご支援により大会参加が実現し、そして激励や応援が世界を相手に挑戦し続けた選手に力を与えていただきました。

世界選手権の報告の冒頭、まずは皆様に心よりの御礼を申し上げます。

知的障がい者サッカー日本代表が I N A S サッカー世界選手権に参加するのは、今回で5回連続5度目となりました。前回2014年のブラジル大会では、私たちが長く目標としていた決勝進出を初めて実現いたしました。

この結果は、2010年南アフリカ大会以降、知的障がい者がサッカーを行う環境づくりを改めて見直し、選手へより多くの機会提供や高いレベルでのトレーニング環境、指導者育成事業を全国的に展開していったことの成果だと考えております。

今回、スウェーデン大会に向かう西眞一代表監督は前回大会の結果を受け、「ファイナリストになること」を目標に掲げ、日本全国からより広く候補選手を招集し、トレーニングに励んでまいりました。その結果、全国約7200人の選手の代表として、平均年齢21歳の若き日本代表が結成されました。

大会結果は残念ながら前回の結果を上回ることができませんでした。しかし、同じ目標に向かって選手とスタッフが一致団結し戦い抜きました。最終戦となった8月17日の5-6位決定戦のロシア戦は、その象徴的な試合となりました。ピッチ上の選手たちは、苦しい試合展開が続く中でも粘り強くボールを追いかけ、延長後半の終了間際に同点に追いつく劇的なゴールを奪いました。

そして、ゴールを奪った時、選手もスタッフもそれぞれの状況や立場を超え、大きな歓喜の輪を作り喜びを爆発させました。

西眞一監督はその選手たちに大会期間中「過去は変えられない。しかし、未来は変えられる」という言葉を選手たちに何度も語り掛けました。知的障がい者は、未だ健常者とまったく同じように日常を送ることは未だ難しく、なかなか夢や希望を持ってない現実があります。しかし、西眞一監督はそんな状況を跳ね返す力を障害の当事者である選手にもってほしいという強い思いから、この言葉を通して、選手自らが自分たちの力を信じて、苦難を乗り越えることを求めました。

私たちは、この劇的なゴールは、障害の垣根などは一切関係なく、チームがコミュニケーションを重ね、信頼関係を築き、同じ夢を追った証だったと思っています。そして、コミュニケーションを重ね、そして共に夢を追いかけること、さまざまなコミュニティや地域、社会で同じ目標をもってともに時間を過ごす事こそが共生社会実現につながるのだと強く感じました。

冒頭の繰り返しになりますが、このような成果は皆様のお力に支えられて実現したものです。改めて深く御礼申し上げます。

そして、どうか今後とも引き続き、障がい者サッカー、そして障がい者スポーツ発展のためにお力をお貸しいただき、よりよい社会の実現に向けて共に歩んでいただけることを強く願います。

どうぞ今後とも宜しくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人 日本知的障がい者サッカー連盟

2. 大会概要

特定非営利活動法人日本知的障がい者サッカー連盟 (JFFID)

I N A Sサッカー世界選手権（通称：「もうひとつのW杯」は1994年にオランダで初めて開催された知的障がい者サッカーの世界最高峰の大会です。4年に一度開催され、2002年日韓ワールドカップ以降はFIFAワールドカップと同じ開催国で行われています。日本は2002年の日本大会から出場し、最高成績は2014年ブラジル大会のベスト4、今大会で5大会連続5回目の出場となります。

<もうひとつのW杯スウェーデン大会概要>

- 大会名称：I N A Sサッカー世界選手権2018
- 開催国：スウェーデン、カールスタッド市ほか
- 開催期間：
 - 開会式・開幕戦 2018年8月5日（金）
 - 決勝戦・閉会式 2018年8月18日（土）
- 競技形式：FIFA11人制サッカーのルールに則り実施（試合時間90分など、すべて同様）



開会式での徳村選手と結城選手。（写真：JFFID/Koichi Saito）

<これまでのもうひとつのW杯大会結果>

- 第1回大会
1994年 オランダ、ホーグベーン市
優勝：ルーマニア 準優勝：スロヴァキア 参加国：12の国と地域
- 第2回大会
1998年 イギリス、レスター市
優勝：ポーランド 準優勝：ブラジル 参加国：14の国と地域
- 第3回大会
2002年 日本、東京都・神奈川県
優勝：イングランド 準優勝：オランダ 参加国：16の国と地域日本は10位
- 第4回大会
2006年 ドイツ、ノルトラン＝ヴェストファーレン州
優勝：サウジアラビア 準優勝：オランダ 参加国：16の国と地日本は11位
- 第5回大会
2010年 南アフリカ、リンボポ州、ポロクワネ
優勝：サウジアラビア 準優勝：オランダ 参加国：11カ国日本は10位
- 第6回大会
2014年 ブラジル、サンパウロ州、グアルジャ州
優勝：サウジアラビア 準優勝：南アフリカ 参加国：8カ国日本は4位

3. 大会結果

<大会結果>

優勝 サウジアラビア
準優勝 アルゼンチン
3位 ポーランド
4位 フランス
5位 ロシア
6位 日本
7位 スウェーデン
8位 ドイツ
9位 (棄権) 南アフリカ



4連覇を飾り優勝トロフィーを手にするサウジアラビアの選手たち (写真: JFFID/Koichi Saito)

<日本の試合結果>

8月6日	グループリーグB	ポーランド	2 - 1	日本
8日	グループリーグB	日本	0 - 1	サウジアラビア
10日	グループリーグB	ロシア	2 - 1	日本
15日	順位決定プレイオフ	スウェーデン	1 - 1 (PK 3 - 5)	日本
17日	5 - 6位決定戦	日本	1 - 1 (PK 2 - 4)	ロシア

<試合詳細>

■第1戦

グループリーグ第1戦 8月6日(水)

日本 1 - 2 ポーランド



写真：JFFID/Koichi Saito

「組織としての狙いを持った守備から素早い攻撃で先制するも、逆転負けを喫す」
決勝トーナメント進出を目指し、負けられない初戦。前半は西真一監督の「プラン通り」に先制し、優位にゲームを進めました。しかしヨーロッパ王者のポーランドに隙をつかれ、2失点。悔しい逆転負けとなりました。

<得点>

前半25分 日本：木村 和磨（東京都、23歳）

前半35分 ポーランド

後半9分 ポーランド

詳細：<http://jffid.com/post-5127-5127.html>

■第2戦

グループリーグ第2戦 8月8日(水)

日本 0 - 1 サウジアラビア



写真：JFFID/Koichi Saito

「堅守速攻を狙い一進一退の攻防を続けるも、後半29分に一瞬の隙を許し敗戦」
相手はW杯3連覇中の王者・サウジアラビア。圧倒的強さを誇る相手に対し、組織的な守備で立ち向かいました。西監督がコンセプトに掲げる「全員攻撃、全員守備」で前半は0-0で折り返しましたが、後半29分に失点。この1点を守り抜かれ、2敗目を喫しました。これにより、リーグ最終戦を残して敗退が決定。順位決定戦へ進むこととなりました。

<得点>

後半29分 サウジアラビア

詳細：<http://jffid.com/post-5192-5192.html>

■ 第3戦

グループリーグ第3戦 8月10日(金)

日本 1 - 2 ロシア



写真：JFFID/Koichi Saito

「開始早々先制し、前線からのプレスにより多くのチャンスを作るも、逆転負け」

日本は前半から攻撃テンポをつくり、少ない人数でのパス交換から早い時間に先制。1点リードのまま折り返しましたが、後半はロシアに押し込まれ、14分に失点すると、43分に逆転を許しそのままタイムアップ。試合後、日本代表はピッチ上でミーティングを行い、気持ちを切り替えて順位決定戦での巻き返しを誓いました。

<得点>

前半8分 日本：10 佐藤 快（千葉県、20歳）

後半14分 ロシア

後半43分 ロシア

詳細：<http://jffid.com/post-5242-5242.html>



写真：JFFID/Koichi Saito

■ 第4戦（順位決定戦プレーオフ）

特定非営利活動法人日本知的障がい者サッカー連盟（JFFID）

順位決定戦プレーオフ 8月15日(水)
日本 1 - 1 (PK 5-3) スウェーデン



写真：JFFID/Koichi Saito

「前半に先制するものの、後半に一瞬の隙を許し同点に。PK戦の末、今大会初勝利。」
両者譲らぬ展開。1-1のまま延長戦に入っても試合は動かず、PK戦へ。先行の日本が4人目まですべて成功させると、GK内堀嗣円選手がスウェーデンの4人目を見事に止めました。プレッシャーがかかる中、5人目のキッカー谷口拓也選手が冷静に決め、日本は初勝利！ 一体感を持って、全員で掴んだ勝利でした。

<得点>

前半38分 日本：8 安達 寛人（島根県、19歳）

後半38分 ロシア

詳細：<http://jffid.com/post-5319-5319.html>

■最終戦（5-6位決定戦）

5-6位決定戦 8月17日(金)

日本 1 - 1 (PK 2 - 4) ロシア



写真：JFFID/Koichi Saito

「堅守速攻でチャンスを作るがシュートまでいけず。一進一退の攻防を続けるも、PK戦の決着により6位。」

拮抗した試合展開で0-0のまま延長戦に突入。前半、ロシアがPKで先制すると、ロシアの強さ、高さに苦しむ展開に。後半終了時間に差し掛かった120分。途中出場の原良田龍彦選手が起死回生の同点弾を決め、2試合連続でPK戦へ。最後まで勝つためにチーム一丸となり戦った日本代表でしたが、PKは2-4で敗戦し、日本の6位が決定しました。

<得点>

延長前半 7分 ロシア

延長後半 15分 原良田 龍彦（鹿児島県、18歳）

詳細：<http://jffid.com/post-5358-5358.html>

4. 日本代表スケジュール

期日	午前	午後	夜
8月 1日 (水)	成田空港出発		カールスタッド到着
8月 2日 (木)	散歩	トレーニング	ミーティング
8月 3日 (金)	トレーニング	トレーニング	ミーティング
8月 4日 (土)	トレーニング	選手チェック	ミーティング
8月 5日 (日)	トレーニング	オープニングセレモニー・開幕戦	ミーティング
8月 6日 (月)	移動	★ポーランド戦	—
8月 7日 (火)	トレーニング・リハビリ	ランニング	ミーティング
8月 8日 (水)	ランニング	★サウジアラビア戦	—
8月 9日 (木)	—	トレーニング・リハビリ	ミーティング
8月10日 (金)	ランニング	★ロシア戦	ミーティング
8月11日 (土)	オフ (グループ散策)	オフ (グループ散策)	—
8月12日 (日)	トレーニング	ランニング	ミーティング
8月13日 (月)	トレーニング	ランニング	ミーティング
8月14日 (火)	トレーニング	ランニング	ミーティング
8月15日 (水)	ランニング	★スウェーデン戦	—
8月16日 (木)	トレーニング・リハビリ	準決勝観戦	ミーティング
8月17日 (金)	ランニング	★ロシア戦	—
8月18日 (土)	3位決定戦観戦	決勝戦観戦	レセプション
8月19日 (日)	カールスタッド出発		
8月20日 (月)	成田空港到着・解散		



成田空港からの出国前にガッツポーズを作る選手たち (写真: JFFID/Koichi Saito)

5. 大会・代表総括

「スウェーデン大会の成果と課題」（西眞一代表監督）

日本チームの目標であった「ファイナリスト」実現のためには、初戦の「ポーランド」とのゲームは特に重要でした。日本チームが「勝つ」ためにどう戦うかを考えた時に、どうやって「得点」を奪うかが必要でした。行き着いた答えは、日本選手の良さを全面に押し出すことのできる「前線から積極的に奪いに行き、高い位置でコンパクトにボールを奪い、時間をかけずにゴールを奪う」戦い方で、選手と共有し試合に臨みました。

大会を通じての成果は以下の三点です。

① 一点目は、意図的な攻撃と守備ができ、5試合中4試合は得点を挙げられたことと、一試合で大量失点することがなかったことです。

サッカーの「目的」と攻守における「原理原則」を選手と共有し、選手の持ち合わせた「能力」とそれぞれの「特徴」を融合し、体格やスピードで勝る相手に恐れることなく向き合い、日本人としての良さを全面に出すことができました。

地域トレセンやU18ナショナルトレセンなどで積み上げてきた「パス&コントロール」「ボールを奪う（個人戦術・グループ戦術）」を代表のプレーモデルとし、重ねてきた代表合宿でそのクオリティを求め続け、代表チームの戦い方のベースとなりました。攻撃時に、選手が良い距離感で関わり、テクニックを発揮することで意図的にボールが動き、ゴールを奪うことができました。

また、外国選手と日本選手の違いである体格やスピードの差について、前者はボール状況に応じて、落ち着いて対応し、二人で挟み込んで奪うこと、後者は相手選手への素早いアプローチを必須として次のプレーを予測した良いポジションからチャレンジすることで、対等以上に戦えるシーンが増えました。

② 二点目は、選手とスタッフ、選手同士における積極的なコミュニケーションにより、同じベクトルを向いてサッカーができたことです。選手とスタッフで常に互いを確認し、意思疎通を図ることが重要でした。ピッチ内外で多くの意見交換をしました。私が伝えたいことが伝わっているのか？選手はそれをどんな風に受け止めて、どのような思いでプレーしているのか？大会期間中、選手同士で戦術について意見交換もされるようになり、分からない時はスタッフに確認や意見交換が自発的にされるようになりました。

③ 三点目は、常に映像による分析とレクチャーを実施しました。選手全員に対し伝えたいことをより分かりやすくするための視覚支援として、大会時及び合宿時にプレー映像を撮影し、求めるプレーに対し、できていること、できていないことについて、映像を観ながら選手と確認を行いました。イメージを共有してトレーニングを行うことでトレーニングもより効果的なものになり、選手の理解と実践がひとつに繋がったと思います。



選手同士で練習中も積極的にコミュニケーションを図った（写真：JFFID/Koichi Saito）

次に、課題については、ひと言でいうと「日本が目指すサッカーの攻守の質を90分間保てなかった

こと」です。具体的に三点あります

① 一点目は、全失点の7点中6点が後半以降の失点で、うち5点はその30分を過ぎてのものであったことです。

(「主体的・意図的な攻守」 + 「全員攻撃・全員守備」) ×ハードワーク (試合終了まで) = 勝利

上記は、代表チームの目指すサッカーでありましたが、試合終盤にかけて連動した守備が保てなくなり、「隙」を突かれ失点しました。国内合宿では、90分ゲームを数多く実施し、日常におけるゲーム体力の弱さを改善するように努めてきました。失点の原因は体力の低下によるもので、①1stDFのアプローチの遅れ、②守備ラインの押し上げ不足です。

大会期間中、試合を重ねるごとに最後まで走りきれるようになっていたことを考えると、日常でも90分ゲームをスタンダードとしてトレーニングを継続していくと、選手は更に良いパフォーマンスを発揮できるものと確信しました。

② 二点目は、攻撃時の判断を伴ったテクニック (コントロール、パス、ドリブル、ターン) のクオリティ向上です。特に、奪ったボール再度失わないために、観ておいて判断を伴ったプレーをすることです。例えば、局面での話になりますが、ボール保持者の進行方向があり、相手が「どの方向から」「どの距離感で」奪いに来るのか? という状況を観て、適切に判断し、プレーすることが重要で、或いは、必要に応じて一度判断したプレーを、ボール状況、相手状況、味方状況で、再度判断を変え、プレーしていくという「勇気」と「スキル」が必要であると思います。このようなことは、今後日本が拮抗したゲームを「モノ(勝利)」にしていくためには不可欠な要素だと考えます。以上のように、「観ておいて」「ボール状況」「相手状況」「味方状況」に応じ、落ち着いて個のテクニックを発揮できる選手の育成が今後必要です。

③ 三点目は、GKの育成です。優勝したサウジアラビアのスタッフからは日本のGKは「ベスト・ゴールキーパー」という評価もいただきました。日本の守護神として、相手の猛進に怯むことなく、また日本ゴールに向かうボールに対し常にアグレッシブに立ち向かう姿は勇敢でした。しかし、ペナルティエリア内における選手が密集するゾーンで、ボール状況及び相手に対応している味方状況の観察を踏まえ、ボールに対し出るのか? 出ないのか? の判断に基づいたプレーの決定には課題が残りました。ゲームをコントロールする機能を持つGKの能力は、今後一層フットボーラーとしてより多くのスキルとクオリティを求められます。今後は、良い部分はそのまま伸ばしつつ、テクニックと冷静に戦況を見極め沈着な対応も兼ね備えた選手を、世界基準として育成する必要があります。



以上、成果と課題を挙げましたが、「2030年に世界一」を目指す日本にとって、この経験を世界基準として4年後の日本代表チームに積み上げて欲しいと願います。

まとめとして、世界で勝つために 常に立ち返る場所は、
『 基本の徹底 (テクニック、ボールを奪う、走る) の追求 + 選手とのコミュニケーション 』
であると思いますし、それを再度認識し、行動することです。

最後に、選手を派遣してくださいましたチーム、指導者、会社、関係者の方々、そして、合宿先の流通経済大学サッカー部、栃木県さくら市、民宿「樽分」、栃木SC、強化試合をしてくださったチームの皆様、大会参加に際し応援Tシャツを購入していただいた方々、クラウドファンディングで支援していただいた方々、JPC、連盟関係者、この日本代表チームに関わってくださいました全ての方々に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

6. 出場選手、スタッフのご紹介

以下、ポジション、氏名、出身地、年齢、もうひとつのW杯出場歴 ※今大会含む

G K	内堀 嗣円 (神奈川県 24歳 ②)	
	依田 航 (北海道 24歳 ①)	
D F	結城 隆 (東京都 23歳 ②)	
	谷口 拓也 (鹿児島県 23歳 ②)	
	吉永 裕也 (山口県 22歳 ①)	
	小林 勇介 (静岡県 20歳 ①)	
	杉村 流生 (静岡県 18歳 ①)	
	草田 佑介 (広島県 17歳 ①)	
M F	木村 和磨 (東京都 23歳 ②)	
	徳村 雄登 (京都府 21歳 ②)	
	上山 紘輝 (静岡県 21歳 ①)	
	佐藤 快 (千葉県 20歳 ①)	
	安達 寛人 (島根県 19歳 ②)	
	丸山 一喜 (奈良県 19歳 ①)	
	原良田龍彦 (鹿児島県 18歳 ①)	
F W	浦川 優樹 (東京都 27歳 ④)	
	平野 貴士 (山口県 29歳 ①)	
監督	西 眞一 (鹿児島県 45歳 ②)	※2014年大会はコーチ
コーチ	泉谷 光紀 (鹿児島県 34歳 ①)	
	嶋 将平 (奈良県 33歳 ①)	
G Kコーチ	岡田 裕樹 (北海道 48歳 ①)	
アスレチックトレーナー	澤野 啓祐 (千葉県 35歳 ③)	
映像分析コーチ	中嶋 円野 (福岡県 25歳 ①)	
主務	利根川 俊介 (神奈川県 34歳 ③)	
広報	斎藤 紘一 (神奈川県 40歳 ②)	



写真：JFFID/Koichi Saito

この事業は、競技力向上事業助成金を受けて実施されました。

JAPAN SPORT
COUNCIL
日本スポーツ振興センター
競技力向上事業

特定非営利活動法人日本知的障がい者サッカー連盟 (JFFID)